河川生産力有効利用調査

北角　　至・松岡　正義・寒川　友華
谷本　尚則

この調査は,河川漁業の振興に資するため最も重要な魚種であるアユを対象として,種苗放流による放流技法を検討するため,平成2年度より着手したところである。

当面の課題として,栽培漁業センターでは県下の全放流種苗の25パーセントに当たるアユ放流種苗を生産し配布しているが,放流後の効果については,ほとんど知見がないのが実情であり,種苗をより有効に活用するためアユの放流技法について検討するものである。

調査は,これまで他県において中小河川での調査が実施されているが,大きな可川での調査事例がなく,このたび,吉野川本流（第十堰～池田ダムの間）を対象として実施していくこととした。今年度は,吉野川に関する既往資料および関係文献の収集と現地の河川漁業の状況について聞き取り並びに調査を実施し,平成3年度に向けての予備的な資料の収集を行った。

1　聞き取り調査の概況

1) 放流種苗の放流時期は4月を主に,5月となっており,放流量は琵琶湖産が約12.6トン,人工産1.3トンで,放流場所は各組合水域で数カ所に分散し,また,全域では十数カ所が放流地点となっている。

2) 漁期は,釣り漁（なぐり,友釣り）として6月1日から10月19日,11月11日から12月31日で,この間,網漁（刺網,なげ網,とう網）が8月1日～9月20日（50日）許可されている。一方,産卵保護のために禁漁期が10月20日～11月10日（20日）となっている。

3) 漁場は,各組合での漁場区域があり,組合員は所属する組合の漁場水域で漁を行い,また,組合員が漁場としている場所から漁場を大きく移動することは少ないようであった。

4) 組合員は支流を含め対象水域で約5,300人と多かった。

2　現地調査

1) 漁場利用状況（漁場,釣り人数）を知るため,6月1日（解禁日）,7月15日（日曜日）,車の走行（日中）観察を行った。

釣り漁場は,両日とも概ね利用されている漁場範囲が同じようであり,小さいグループを含めると47カ所程度の漁場が観察された。

また,6月1日には総数424人（船釣り115人,釣り人309人）,7月15日には総数260人（船釣り

73 人,釣り人 187 人）が観察された。

2) 河床の付着藻類調査を 8 月 21 日に三加茂町地先,穴吹橋上手,柿原堰下手で早瀬,平瀬について行った。付着沈殿量は,25㎠当たり三加茂町地先では 0.3～8.0mℓ,穴吹橋上手では 0.3～10.5mℓ,柿原堰下手では 3.6～10.4mℓで,その時の水温および流速は,それぞれ 24.7℃・20～104cm／s,26.8℃・32～128cm／s,26.7℃・30～104cm／s であった。

3) アユと初期成長において耳石の日周輪から,琵琶湖産,人工産,海産の判別がされている報告[1)]をもとに,各アユの各地先における定着分布を知るため,各組合地先の天然アユを用いて耳石の日周輪を検討したが,今回の調査ではベースとなる放流された湖産,海産稚アユの収集ができず,平成 3 年度には各アユを収集し検討したい。

参考文献

1) 今野哲他（1988）：アユの再生産機構と資源評価に関する研究. 昭和 63 年度水産業関係地域重要新技術開発促進事業報告書. 平成元年 2 月山形県内水面水産試験場